

母性主義フェミニズムを超えて ——現代フェミニズム小説の先駆としてのハーヴェル『ホムンクリーデンの 帝国で (*Im Reiche der Homunkuliden*)』(1910)

徳永菜摘野

序

ウィーンの小学校教師、劇作家、小説家ルドルフ・ハーヴェル (Rudolf Hawel 1860-1923) は『ホムンクリーデンの帝国で』において人工生殖と人間社会の未来を主題化し、オーストリアのサイエンス・フィクション (以下 SF とする) の先駆者の一人となった。西暦 3907 年、ホムンクリーデン、すなわちドイツ語で「人工的に作られた人間」を意味するホムンクルスに支配され高度に技術化された未来国家では、人工生殖技術により自然生殖と性 (本稿ではセックスとジェンダーの両方を意味する) は不要となり恋愛、結婚、家庭生活は廃止された。「女性から生まれた者たち (Weibgeborenen)」のわずかが、なお世界最北の地に生き残っている。

1907 年 3 月 21 日、ドイツ人教授フォラウスと彼の忠実な召使ロレンツは、フォラウスの発明した新しい催眠技術、すなわち「動物と人間の身体の細胞に生命を与えている電流を停止させ (die elektrischen Ströme, die die Zellen des Tier- und Menschenkörpers beleben, zum Stillstand zu bringen)」(15)、「細胞の電流を再び呼び起こす (Erwecke [...] die elektrischen Ströme der Zellen wieder)」(15) ことで二千年持続する眠りに入る。計画通り、彼らは二千年後の 3907 年 7 月 14 日、ホムンクリーデンの帝国の只中で目覚める。新世界に対する彼らの感激はじきに失望、恐怖、戦慄、そして旧世界への憧憬に変わる。過去への郷愁はロレンツの中で、ホムンクリーデンに彼の昔の恋人に似た女性の人造人間を作らせるといふ願望を呼び起こす。彼の要求は予期せぬ騒乱と新参者たちに対する反感の原因となり、彼らは今なお人間たちが住むアイスランドへの逃走を余儀なくされる。

本小説は両性生殖をやめ、性のない人間を製造することで成り立つ未来社会を中心テーマに据えている。この点で本小説は、例えばル＝グウィン2の両性具有の異星人社会を舞台とする『闇の左手』(1969) や、疫病で男性が絶滅した後、単一生殖による女性だけの未来社会が訪れるとしたラスの『フィーメール・マン』(1970)、あるいは人間とクローン人間との確執を描いたウィルヘルムの『鳥の歌いまは絶え』(1976) など、両性生殖とは異なる生殖様式をもつ架空の社会を構築することで女性性の社会的、文化的意味を問う現代のアメリカ・フェミニズム SF 小説の先駆、あるいはその原型である。3 この見解には反論もあろう。なぜなら、男性作家であるハーヴェルがフェミニストであったという事実は筆者が知る限りなく、また本小説は第一次世界大戦前の女性作家たちによるドイツ語圏のフェミニズム SF に比べると男女の同権や女性の解放といったメッセージ性に欠けるからである。4 しかしヴァイニングアの『性と性格』(1903) に代表されるように女性蔑視が甚だしかった時代において、本小説が女性の社会的、文化的な意義を認めた点に、現在ではともすれば反フェミニズムとも受け取られかねない保守的な女性の意義付け、既存の性的役割への女性の封じ込め以上の、女性に対する強い承認と擁護を読み取ることができる。5 さらにハーヴェルは人造人間の未来からジェンダーだけでなく、セックスをも取り去ることで、二十世紀初頭におけるドイツ語圏の母性主義フェミニズムの先を見ていた。本稿では、ハーヴェルの小説が母性主義フェミニズム、とりわけ社会や国家にとって有用な母性に対する批判から個人の有能性への懐疑というより大きなテーマへと移行し、作中のみならず現実における未来の全体主義社会に対し警告を発している点を指摘する。

オーストリアの母性主義フェミニズム ーハイニッシュを例に

この小説において、女性は人間性の源泉ないし原動力である。つまり人造人間の非人間性の原因はすべて、彼らの社会における女性の欠如に帰せられる。女性に対する肯定的な評価は本小説において多くの場合、教授とロレンツの口を通して表される。まず女性の生物学的価値は、未だ女性が存在する北方の幸福な人間社会と、女性が消滅した陰惨なホムンクリーデン社会の対置により、女性の出産や自然生殖による人類の存続が高く評価されることで明確に肯定される。第二にこの小説では女性の社会的、文化的な価値として、人間の幸福の創出、感情や良心の根源、芸術における創造力の活性化が挙げられる。以上の女性の肯定的な評価により、ハーヴェルは『性と性格』にあるような男性側からの女性蔑視とは逆に、男性側から女性を称賛したといえる。

では、ハーヴェルの立場は十九世紀末から二十世紀初頭のドイツ語圏フェミニストに近かったのかというと、そうとも言い切れない。そもそも穏健派、急進派を問わず女性運動家たちは、女性の同権や社会参画といった実践的な目的があったのに対し、ハーヴェルは彼の文学作品において女性の存在意義という哲学的な問題に取り組んでおり、両者の目的や表現媒体、想定される読者は異なる。しかしこの小説を当該時代の女性に関する言説の中に位置付けてみると、ハーヴェルの女性評価は単行本出版当時の男性側からの女性蔑視ともドイツ語圏の女性運動とも異なる、独自の立場からなされているとわかるのである。

ホムンクリーデンに関するハーヴェルの一連の連載（短編）小説が執筆・発表された1890年代頃から1910年にかけて⁵、ウィーンにおける女性運動は初めて政治的な全盛期を迎えた。ドイツの女性運動穏健派に支配的であった思想に母性主義フェミニズムがある。姫岡とし子によるとこのイデオロギーの基本理念は男女の能力が本質的に異なることを前提としながらも、時代によって変遷した。ドイツの女性運動穏健派は十九世紀半ば以

降、「母性（子どもを産み、育てるという身体的な要素以上に、情感、温かみ、調和、包摂、利他性、人間性、魂の豊かさなどの精神的かつ道徳的な特性を意味するものであった）」⁶を強調し、1890年から1905年前にかけて、この母性を客観的有能（用）性ばかりを追求する近代文明（男性）に対抗する女性の価値として強化した。姫岡はドイツにおける母性主義フェミニズムに限定して論じているが、私見ではハプスブルク帝国の首都ウィーンにおいてもドイツ市民女性運動穏健派と同じような傾向が見て取れる。なぜなら1902年「オーストリア女性協会同盟（Bund Österreichischer Frauenvereine）」を創設し、この組織の長年の代表としてオーストリアの市民的・穏健的な女性運動で指導的な役割を担ったマリアンネ・ハイニッシュ（Marianne Hainisch 1839-1936）が、姫岡が定義する母性主義に近い立場から女性運動を展開したからである。

ハイニッシュは母性をどのように捉えていたのか、以下に挙げる彼女の三つの講演に関するエルゼンの解説を参照してみよう。エルゼンによると女性運動に関するハイニッシュの思想の中心には常に母や母性（Mutterschaft）があった。女性の同権を求めるハイニッシュの主張はしばしば彼女自身の母としての体験に基づいており、彼女が女性の母役割に疑問を呈することはなかった。エルゼンはハイニッシュが1892年に行った講演『女性問題に関する母の言葉』に関し、「ハイニッシュにとって女性の同権は母としての『聖なる権利』なしにはほとんど考えられない（Für Hainisch ist die Gleichberechtigung der Frau ohne die „heiligen Rechte“ als Mutter fast undenkbar）」⁷と解説している。しかしエルゼンによるとハイニッシュにとって母とは産み育てる女性のみを意味したのではない。ハイニッシュの1904年の講演『母の立場からの中高等学校の経費と成功』において複数形の「母たち（Mütter）」は、「社会的に非常に異質な集団を論証的にまとまりへと形成する（formt eine soziologisch sehr heterogene Gruppe diskursiv zu einer Einheit）」⁸ために用いられた。ハイニッシュの「母たち」概念は「『妻、

母、主婦』という古典的な役割に女性たちを還元する (eine Reduktion von Frauen auf die klassische Rolle „Ehefrau, Mutter und Hausfrau“)⁹ではなく、実際には多様な在り方で存在する女性全体の同権を「政治的、社会的そして経済的な方法で (in politischer, sozialer und wirtschaftlicher Weise)¹⁰主張するために用いられたのであり、それは筆者の見解ではハイニッシュの戦略だった。というのもハイニッシュはこの講演で、母性を通じて中等教育を改善する必要性や女性たちが結束すれば男性が支配的であった中等学校を変革できるという希望をより多くの女性たちに訴えかける必要があったからである。

しかし筆者の見るところ、ハイニッシュは「母たち」概念による戦略とは別の戦略でも女性の同権を主張している。それが明確に表れているのが、ハイニッシュの講演の記録をもとに 1913 年に刊行された『母』である。このテキストの中でハイニッシュは「最も有能な個々人 (die tüchtigsten Einzelindividuen)¹¹の育成が「人間社会における女性性の課題 (die Aufgabe des weiblichen Geschlechtes in der menschlichen Gesellschaft)¹²や、女性の「重要な文化的使命 (wichtige Kulturmission)¹³なのであって、母たちにはその責任があるとみていた。つまり彼女は「有能な個々人」を産み育てる性としての母性が社会に役立つことから女性の同権を訴えるという戦略をとった。姫岡は 1905 年以降のドイツ穏健派の女性運動について「女性と国家の関係が運動の基軸となり、もっぱら女性を国家建設にどう実質的に参加させるのか、女性は国家のために何をなすべきなのかという方向に収斂されていく¹⁴と説明し、「穏健派は断固として個人主義を退け、『全体のために』という立場を鮮明にした¹⁵とも述べている。この 1905 年以降のドイツ穏健派女性運動の見解は、有能 (用) 性を追求する近代文明 (男性) への対抗としての母性という姫岡が挙げる前述の 1890 年以降の穏健派運動の基本理念からの転換を示している。つまり 1905 年からのドイツ穏健派女性運動においてはそれより前の

「近代文明 (男性) 対母性 (女性)」という図式は成り立たず、近代文明 (男性) を支え、促進することに母性の価値が置かれたのである。筆者の見解では「有能な個々人」の産育を社会にとっての女性の有能性とするハイニッシュの第二の「母たち」戦略は、こうしたドイツ穏健派女性運動の方向性と協調していた。しかし何をもって個人が有能であるとするのか、そして「有能な個々人」を産み育てる母性の有用性とは具体的に何なのか、ハイニッシュは『母』の中で明言していない。これは個人の有能性や母性の有用性が社会によって決定されることを示唆していたが、それはひいてはハイニッシュのヒューマニズム的思想¹⁶とは異なる方向に個人や母性の有能 (用) 性が曲解される危険をはらんでいた。ハーヴェルが本小説を通して批判したのは有用な母性を称揚するこうした戦略であったのだが、それについては次節で詳述する。

有用性という価値—母性主義フェミニズムに対する批判

先に本小説では女性の社会的、文化的な価値として、幸福の創出、感情や良心の根源、芸術的な創造力の活性化が挙げられていると述べたが、これらは姫岡が挙げる母性の精神的かつ道徳的な特性と近似している。十九世紀後半から二十世紀初頭のドイツ語圏の SF には市民的な価値観を反映させたものが多く見られるが、それらはあくまで市民男性の価値観の反映にとどまっていた。それに対し本小説において、市民女性運動穏健派の母性主義フェミニズムが提唱する「母性」に近い女性の社会的、文化的な特性を、男性作家が男性登場人物の口を借りて主張している点は、男性が女性の特性を認め称賛することが稀であった時代において特筆に値するだろう。

しかしながら本作は母性主義フェミニズムに完全に染まっているのではなく、それどころかそれとの差異によって、このイデオロギーを批判している。この小説における女性肯定と母性主義フェミニズムの最大の違いは、作中に母性のもっとも

基本的な特性であるはずの「子どもを産み、育てる」という身体的な要素」が欠落している点である。この小説では母は一人も登場せず、結末でもロレンツと結婚する女性が母となるかどうかについて言及されない。つまりこの小説は徹底的に母を排除しているのである。しかしながら「女性から生まれた者たち」と表現される人間とホムンクリーデンとの決定的な違いとは常に、作中では直接的に描かれることのない母の存在である。言い換えれば、母が不在なことが「女性から生まれた者たち」という表現と相まって母の存在を強調している。姫岡によると母性主義フェミニズムは「母性精神の社会的有用性を根拠に女性の社会進出を正当化」¹⁷したのだが、ハーヴェルがこの小説において母を描かなかった理由はまさにこの「母性精神の社会的有用性」への懐疑であったと推測される。ドイツ語圏の母性主義フェミニズムはナショナリズムの高まりと二度の大戦の中で、母性の精神性よりも、祖国への奉仕としての産む性を強調するようになった。ここにおいては女性もまた男性同様、国家を動かす一歯車にすぎず、その意味で男性化してしまったと言える。第一次世界大戦前の段階においてハーヴェルがどこまで母性主義フェミニズムの限界と危険に意識的であったのかはわからないが、彼は女性の社会的、文化的な有能性を前述したようにいくつも挙げながらも、女性の生殖能力の国家や社会にとっての有能性を取りあげることを意図的に避けている。そこには人間の再生産手段としての女性の有能性が女性を社会に隷従させるという狙いがあったように思われる。

ハーヴェルは本小説の中で女性の存在する意義をこうした世俗的で国家権力の道具にされかねない有用性＝母性から、より高次の普遍的特性に帰そうとした。彼は生物学上の性差（セックス）は決して自明なものでも不変なものでもなく、科学技術によって不要になりうるゆえ、社会的、文化的な性差（ジェンダー）と同様のものであることを示した。この示唆はダナ・ハラウェイの『サイボーグ宣言』（1985）における「生物学的解剖学

的に規定され、動かしえないと考えられていた性差（セックス）を語る言説すらも、実際のところ歴史的政治的に構築されてきた性差（ジェンダー）によって規定されかねない事情」¹⁸に通じており、極めて現代的である。極端な話であるが、もし女性が存在する意義を出産によって社会の役に立つことのみにあると考えるならば、出産以外の方法でも子どもが生まれるようになった場合、出産による社会奉仕は女性のみのも有能性ではなくなり、女性の存在する意義が危うくなってしまわないだろうか。またもしも自然生殖ではなく科学で人間を作りだせるのであれば、自然生殖によるよりも有能な人間を思いのままに作りだすことも可能になるのではないか¹⁹。

こうした極論を戯画化したのが、ホムンクリーデン誕生と女性の消滅の歴史である。この未来史では、女性の社会進出と避妊による少子化・労働力不足を解決するため人間の科学者の手で人造人間が開発される。女性は人造人間製造技術により産む性としての存在意義を奪われ、結果この世から消える。この過激な発想によってこの作家は女性を狭義の母性、つまり「子どもを産み、育てる」という身体的な要素から広義の母性、すなわち精神性、道徳性、創造性へと解放し、この広義の母性を母ではなく女性の特性として定義し直した。しかしだからといってハーヴェルは自然生殖や産む性としての母性を否定したのではない。作中では「女性から生まれた者たち」だけが真の人間たりうるのであって、女性から生まれなかった者たち、すなわちホムンクリーデンに人間性は付与されない。ハーヴェルが否定したのは女性の母性を国家や社会といった全体の有用性と捉えることである。ゆえに彼の批判の対象は、母性を社会の有用性とした女性運動やそれに同調する男性、母性を利用する国家、はては女性に限らず人間の価値を有能性だけで判断しようとする近代人の偏った価値観にまで広がるのである。言い換えれば彼は、有能（用）性重視の近代的価値観を批判する 1890 年から 1905 年より前のドイツ語圏母性主義フェミニズムの本来の立場に立ち返り、1905 年以降のドイツ語圏母性主義フェミニズムの母性＝有用性

という価値観を批判するのである。

結論

ハーヴェルはこの作品で人間の価値を有能性のみを求める社会の極限を描いている。誰とも取り換えの利かない唯一無二の一回限りの個としての私、すなわち個人の独自性は人間の複製技術により消滅してしまう。個の独自性が存在しないホムンクリーデンの帝国では、個人は社会という大きな機械を構成する一歯車としての小さな機械とみなされる。しかしその巨大な「国家機械 (Staatsmaschine)」(318) はロレンツの言うように「誰のために動いているのかはわからない (man weiß nicht, für wen diese Maschine arbeitet)」(315) ゆえに、ここでは個人の有能性の意味や、国家への盲目的隷従が問題となる。産む性としての母性を社会の有用性としたドイツ語圏の女性運動家たちが、大戦時の国家総動員や、ナチズムと迎合してしまった例は²⁰、社会の要請に従順に答え、社会にとって有能であろうとし、その有能性の意味を考えない危険性の実例であるように思われる。

【注】

- 1 Hawel, Rudolf: Im Reiche der Homunkuliden. Wien (Gerlach & Wiedling) 1948. 以下、同書から引用する際は引用後に括弧付で頁数のみを示す。なお本稿のドイツ語文献引用個所の日本語訳は筆者による。
- 2 ここで先駆や原型という語が示すのはハーヴェルの SF 小説と本文に挙げた三人の現代アメリカ SF 作家たちのフェミニズムという共通テーマに関する連関であって、これらの作家間の影響関係を指しているのではない。
- 3 Vgl. Münch, Detlef (Hg.): Die Frau der Zukunft vor 100 Jahren: sieben vergessene feministische Utopien der Jahre 1899-1914 von Frauen zur Emanzipation und Frauenwelt der Zukunft. Mit Einleitung, fünfzehn Originalillustrationen, Biographien, Bibliographie und Nachwort. Beiträge zur Bibliographie und Rezension der deutschen Science Fiction Band 12. Dortmund (synergen) 2010.
- 4 ヴァインガー『性と性格』と本小説との女性性、男性性に関する評価の詳細な比較は紙面不足により別の機会に行いたい。
- 5 本小説は単行本として刊行される前に、まず 1890 年代頃、『4000 年からの回顧 (Ein Rückblick aus dem Jahre 4000)』、『ホムンクリーデンの帝国から (Aus dem Reiche der Homunkuliden)』というタイトルの連載短編小説として「ノイバウアー・レビュー

(Neubauer Revue)」と「オストドイチェ・ルンドシャウ (Ostdeutsche Rundschau)」の文芸欄に掲載され、つぎに単行本と同じタイトルの連載小説が、ウィーンの日刊紙「ディ・ツァイト (Die Zeit)」に 1907 年 10 月 6 日から翌年 2 月頃に渡って掲載された。

- 6 姫岡とし子 (1993)『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房, 2 頁/vgl. auch ebd., 182-183 頁.
- 7 Elsen, Thierry: Kritischer Kommentar. In: Hainisch, Marianne: Die Mutter: versehen mit einem kritischen Kommentar von Thierry Elsen, einem annotierten Bildteil von Simone Stefanie Klein sowie mit einem Geleitwort von Eleonore Hauer-Rona. Thierry Elsen; Simone Stefanie Klein (Hg.) 1. Aufl. Wien (edition libica) 2016, S.41-84, 60/vgl. auch Hainisch, Marianne: Ein Mutterwort über die Frauenfrage. Vortrag gehalten am 1. Februar 1892 zu Wien im „Verein für erweiterte Frauenbildung“. In: Jahresbericht des Vereines für erweiterte Frauenbildung in Wien. 4. Vereinsjahr. October 1891-October 1892. Wien (Gesellschafts-Buchdruckerei Brüder Hollinek) 1892, S. 24.
- 8 Elsen 2016, S. 64/ vgl. auch Hainisch, Marianne: Aufwand und Erfolg der Mittelschule vom Standpunkte der Mutter. Vortrag gehalten am 25. Jänner 1904. Wien (Deuticke) 1904, S. 4..
- 9 Elsen 2016, S. 63.
- 10 Ebd., S. 63.
- 11 Hainisch, Marianne: Die Mutter. In: Aus eigener Werkstatt.18. Vortragszyklus im Wiener Volksbildungsverein. Leipzig; Wien. (Hugo Heller) 1913, S. 22.
- 12 Ebd., S. 22 f.
- 13 Ebd., S. 23.
- 14 姫岡 1993, 183 頁.
- 15 Ebd., 183 頁.
- 16 Vgl. Elsen 2016, S. 72/ siehe auch: Hainisch 1913, S. 9.
- 17 姫岡 1993, 182 頁.
- 18 小谷真理「サイボーグ・フェミニズムの世紀一増補版のための解説」ダナ・ハラウェイ, サミュエル・ディレイニー, ジェシカ・アマンダ・サーモンズ (2001)『サイボーグ・フェミニズム増補版』(巽孝之編; 巽孝之, 小谷真理訳) 水声社, 305-349, 314 頁.
- 19 現代の生殖補助医療はその元来の目的、つまり自然生殖の補助から次第に人工生殖へと移行しつつある。例えば幹細胞を利用しクローニングとゲノム編集を生殖に応用したデザイナー・ベビー (vgl. ノフラー, ポール (2017)『デザイナー・ベビーーゲノム編集によって迫られる選択』(中山潤一訳) 丸善出版, 34-37 頁.) や試験管を人工の子宮にし、そこで受精から始まる妊娠の全過程を完遂する「ベビー・イン・ボトル」(vgl. ゴスデン, ロジャー (2002)『デザイナー・ベビーー生殖技術はどこまで行くのか』(堤理華訳) 原書房, 226-233 頁.) の発想は、人工原形質から作りだした人工胚を蜂の巢型の人工子宮で培養するホムンクリーデン製造技術と極めて似通っている。
- 20 姫岡とし子「女性蔑視と『母性礼賛』ーナチの女性政策」『ニュー・フェミニズム・レビュー』Vol. 6 (1995) 62-67 頁.